

編集後記

編集委員として、今年もまた『年報』を無事に発刊できる運びとなったことが何よりも嬉しい。

編集委員の心労の程度は、既定の期日に、既定の分量の原稿が集まるか否かに依存する。今回の場合は、大半の執筆者のほぼ締め切りまでに入稿していただけた。予定の枚数を若干超過した原稿があったが、書評をとりやめ、論文の掲載を優先することで対応した。ジャンル別の原稿枚数の上限に関して、若干柔軟に規則を運用したことを申し添えておきたい。いうまでもないことであるが、今後書評を掲載しない、ということではない。所員が刊行した本の書評は今後も継続してゆきたい。取り上げるべき本の推薦をお願いしたい。

すでにお気づきのように、本号から縦組から横組みへと変更した。横組みへの移行は、すでに何年も前から議論されてきたが、一度変えてしまえば元に戻すことができない変更であるため慎重に検討を続けてきた。今年度は、提出された原稿がすべて横書きであったため、そろそろ潮時かと考え、決断をした次第である。ただし、誤解のないよう付記しておかなければならないが、このことは、執筆者に対して、横書きを強制するものではない。縦組みを指定していただければ、その論稿については縦書きとなる。横書きの間に縦書きのページが挿入されることになる。ほとんどの執筆者がワープロを使い、また印刷技術のデジタル化が急速に進みつつある昨今、これもまた時代の趨勢といえよう。

「所法」で報告されているように、今年度は任期半ばで、しかも年度の途中での所長の交替があった。また、特別研究助成もスタートしたが、その成果は『社会科学研究所叢書』として刊行されることになっている。ここ何年か、年報誌上では特集が組まれていないが、今後は「叢書」にその役割を譲ることになるのかもしれない。本年は社研の新しいページが開かれた年であったと後年の「所史」には記されるかもしれない。

例年のことだが、社研の事務担当の竹内佐和子氏には執筆者との連絡など、ほとんどの実務作業をしていただいている。また、刊行に際しては、公人社の大出明知氏にはお世話になった。末筆ながら感謝の言葉を申し添えます。

(石塚良次)